

女子大生の恋愛における依存度と個人志向性

I.問題と目的

近年では、恋愛関係にある異性に対する依存や執着についての研究がいくつかなされており、恋愛における肯定的な側面に注目した研究も行われている。Feeney&Noller(1990)によって作成された恋愛依存傾向を測定する尺度に、パートナーがいることで安心、安定するという項目が見出されていることから、恋愛や恋人の存在やそれらに対する依存には、肯定的な効果や側面があると捉えられている(伊福・徳田, 2006)。しかし、その一方で異性との適切な距離を保った恋愛関係が結ばずに、異性に過度に依存しすぎてしまう場合もある(伊東, 2000)。

Griffin-Shelly(1993)は、恋愛関係において自他の境界のバランスが崩れると、常に相手を中心として考え、自身を傷つける恋愛依存症に繋がるとしている。また、Mellody(1992)は、恋愛依存とは恋愛感情を抱いている他者に依存・束縛し、その人の面倒を見ることに強迫的に集中した状態になることで、意識上での見捨てられに対する恐れや無意識上での親密さに対する恐れを持ち、他者に対し強迫的に過度の時間や価値を与える、自己管理がおろそかになるなどの行動が見られると述べている。

そこで私達は、恋愛面において、過度に恋人に依存するタイプの人と、そうでない人の違いは何であろうかと疑問にもち、そのことを検討する方法の一つとして、新たに「女子大生の恋愛における依存度」を作成することとした。また、伊藤(1993)により作成された「個人志向性尺度」との間にどのような関係がみられるかを調べることにした。

私たちは、「恋愛における依存度」について「恋愛面においては相手が存在することにより、自分の思考や行動が左右されてしまうもの」と定義づけ、また、「恋愛における依存度の強さ」と「個人志向の強さ」の二つを恋愛に関連づけると、個人志向性が高いタイプの人には、依存せず、個人志向性の低いタイプの人には恋人に依存するのではないかと考えた。

個人志向性とは、伊藤(1995)により、適応的で成熟した特徴をもつポジティブな側面と、不適応的で未熟な特徴をもつネガティブな側面が存在すると指摘されており、ポジティブな個人志向性とは、「自分自身の内的基準への方向性であり、自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で、自己実現に近い特性を表す」とされ、ネガティブな志向性とは、「極度な個人主義や自分勝手(エゴイズム)が前面に出て、利己性や特権意識、あるいは共感の欠如を特徴とする自己愛的性格」とされている。今回はこの 2 種類の側面のうち、ポジティブな側面、つまり、自己実現に近い特性と関連づけて調査することとした。

また、恋愛における依存との関連を調べた研究は、伊福・徳田(2006)の依存における男女差を調べたものや小塩(1995)の自己愛傾向との関係を調べたものなどがみられたが、自己実現と関連づけて研究されたものはあまりみられなかった。

II. 仮説

恋愛における依存尺度が低いほど、個人志向性尺度が高いただろう。

III. 方法

(1). 対象者

栢山女学園大学生 70 名(18~22 歳)に質問紙を配布し、有効回答数は 64 名であった。平均年齢は 20.13 歳(SD=1.0)であった。

(2). 測定尺度

「女子大生の恋愛における依存度」という尺度を女子大生 5 名がアイデアを出し合い、その中から項目としたいものを選別し、作成した。全部で 28 項目の尺度となり、下位尺度は猜疑心・精神的つながり・依存の 3 つとなった。各項目に対し、1=「あてはまらない」2=「ややあてはまらない」3=「どちらともいえない」4=「ややあてはまる」5=「あてはまる」の 5 段階で評定を行ってもらった。

また、「個人志向性尺度」(伊藤 1993)についても評定を行ってもらった。この尺度は自分自身の内的基準への志向性、自分自身の個性を最大限に発揮していく特性を測定する尺度であり、こちらも 1=「あてはまらない」2=「ややあてはまらない」3=「どちらともいえない」4=「ややあてはまる」5=「あてはまる」の 5 段階で評定を行ってもらった。

(3). 手続き

各尺度からなる質問紙を授業外の自由時間の際に、班のメンバーがそれぞれランダムに女子大生に配布し、個別で回答を求めた後、回収を行った。調査期間は 2009 年 11 月 13 日~19 日であった。

(4). 結果の処理

まず始めに、回答をしてもらった質問紙の全てのページにおいて欠損値がないかをチェックし、欠損値のない質問紙のみフェイスシートに通し番号をふった。エクセルにて ID、年齢、性別、項目を入力し、逆転項目には印をつけた。欠損値のないデータを全て入力した後、逆転項目の修正を行った。統計分析は SPSS にて行った。

IV. 結果

(1). 女子大生の恋愛における依存度の分析

まず、恋愛依存度 28 項目の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果およびフロ

ア効果のみられた3項目を以降の分析から除外した。天井効果のみられた項目は、「相手は自分よりしっかりしてほしい」の1項目、フロア効果のみられた項目は、「忙しいときは連絡が来なくても仕方ないと思う」「寂しいと浮気したくなる」の2項目であった。

次に残りの25項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化は、7.60、2.40、1.68、1.47、1.39…というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。Promax回転後の最終的な因子パターンをTable1に示した。

第1因子は9項目で構成されており、「長期間会えないと不安である」「遠距離恋愛は耐えられない」等、相手との心的距離に関するマイナスな項目が高い負荷量を示していた。そこで、「不安」因子と命名した。

第2因子は、7項目で構成されており、「出来るだけ一緒にいてほしい」「毎日好きな人に会いたい」等、相手に何かを求める項目が高い負荷量を示していた。そこで、「願望」因子と命名した。

第3因子は、「何も言わなくてもお互いの気持ちが通じていると思う」「自分の行動を相手に決めてほしい」の2項目で構成されており、相手任せの項目が高い負荷量を示していた。そこで、「他力本願」因子と命名した。

Table1 女子大生の恋愛における依存度の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン) *逆転項目

項目内容	因子		
	1	2	3
長期間会えないと不安である	.99	-.30	-.22
相手の行動を常に把握していないと不安である	.84	-.05	.05
毎日相手と連絡をとっていないと不安である	.71	.09	-.30
自分と同等、あるいはそれ以上の愛情表現をしてほ	.58	.00	.14
*相手が自分以外の異性と会っていても気にならない	.57	-.03	-.06
二人の行動に関することは相手に決めてほしい	.57	.05	.02
相手を疑ってしまう	.52	-.11	.42
相手と考え方が合わないと感じる	.50	.06	.20
遠距離恋愛は耐えられない	.50	.16	-.09
裏切られないか不安である	.36	.16	.32
相手のスケジュール中心で自分の予定を組む	.31	.17	.09
相手の意見で自分の考えが変わる	.30	.30	.00
出来るだけ一緒にいてほしい	.05	.83	-.26
毎日好きな人に会いたい	.09	.69	-.14
相手のことを何でも知りたい	.17	.60	-.14
自分の思ったことをいうことができない	-.10	.53	.44
日常の悩みを相手に相談したい	-.22	.45	.07
束縛されても平気である	.17	.45	.01
*相手のことを十分にわかっていると思う	.05	-.44	.40
相手にいつも自分のことを考え、気にかけてほしい	.33	.41	.03
相手の気持ち・様子を気にしてしまう	.27	.36	.04
*何も言わなくてもお互いの気持ちが通じていると思	-.06	-.14	.58
相手は自分のことを理解してくれていないと感じる	.16	.05	.51
自分の行動を相手に決めてほしい	.30	.31	.34
何か困っていても自分で解決する	-.06	-.01	.16

(2).女子大生の恋愛における依存度の下位尺度の平均、SD、 α 係数

女子大生の恋愛における依存度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「不安」下位尺度得点(平均 3.02, SD 0.84)、「願望」下位尺度得点(平均 3.33, SD 0.78)、「他力本願」下位尺度得点(平均 2.91, SD 0.74)とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「不安」で $\alpha = .86$ 、「願望」で $\alpha = .80$ 、「他力本願」で $\alpha = .47$ となった。「不安」「願望」下位尺度では、ともに0.80以上あり十分な内的整合性があると判断された。一方、「他力本願」下位尺度は、 $\alpha = .47$ と非常に低い値となり0.80に満たなかったのだが、恋愛で相手に決定権を委ねる傾向は、個人志向性との関連を検討する上で重要であると考えた。したがって、第3尺度の「他力本願」下位尺度は2項目ではあるが、女子大生の恋愛における依存度の下位尺度の一つとすることとした。

また、上記の女子大生の恋愛における依存度の下位尺度のそれぞれの平均、SD、 α 係数をまとめたものをTable2に示した。

Table2 女子大生の恋愛における依存度の下位尺度の平均、SD、 α 係数

	平均	SD	α
不安	3.02	0.84	.86
願望	3.33	0.78	.80
他力本願	2.91	0.74	.47

(3).個人志向性尺度の分析

次に、個人志向性尺度8項目の平均値、SDを算出したところ、平均値は25.55、SDは5.45であった。 α 係数は0.73であった。

(4).女子大生の恋愛における依存度の下位尺度間の関連及び個人志向性尺度との関連

女子大生の恋愛における依存度と個人志向性尺度の相関関係を確認するため、3つの下位尺度と、個人志向性尺度の相関係数を求めた。その結果、「不安」下位尺度と個人志向性は $r = -.24$ 、「願望」下位尺度と個人志向性は $r = -.07$ 、「他力本願」下位尺度と個人志向性は $r = -.31$ となり、「不安」下位尺度、「他力本願」下位尺度と個人志向性との間に弱いながらも有意な相関がみられた。

また、女子大生の恋愛における依存度の下位尺度間において不安尺度と願望尺度との間に $r = .57$ のやや強い相関がみられた。

また、女子大生の恋愛における依存度の3つの下位尺度と、個人志向性尺度の相関係数をTable3に示した。

Table3 女子大生の恋愛における依存度の下位尺度と個人志向性尺度の相関係数

	不安	願望	他力本願	個人志向性
不安	—	.57**	.10	-.24
願望	.57**	—	.03	-.07
他力本願	.10	.03	—	-.31*
個人志向性	-.24	-.07	-.31*	—

* $p < .05$ ** $p < .01$

V. 考察

(1). 女子大生の恋愛における依存尺度について

グループで作成した尺度を項目分析したところ、「依存」下位尺度において、「相手は自分よりもしっかりしてほしい」という項目で天井効果、「忙しいときは連絡が来なくても仕方ないと思う」、「寂しいと浮気したくなる」という2項目でフロア効果がみられた。天井効果がみられた項目については、実験参加者の多くが、相手にしっかりしてほしいという考えを持っていたため、平均値が高く、標準偏差の値が小さくなった。そのため、得点分布が高い方に偏っている(天井効果がみられる)と解釈でき、削除となったと考えられた。また、フロア効果がみられた2つの項目については、項目の表現自体が曖昧な表現であったり、極端な表現であったりしたため、平均値が低く、標準偏差の値も小さくなった。そのため、得点分布が低い方に偏っている(フロア効果がみられる)と解釈でき、削除となったと考えられた。

続いて、あらかじめ想定していた「猜疑心」「精神的なつながり」「依存」の3つの下位尺度の因子構造は、因子分析を行った結果、想定していたものとは違ったものとなり、支持されなかった。分析後の結果となった理由は、それぞれの項目に「不安」や「～してほしい」などのキーワードが入るものが多かったため、そのキーワードに影響を受けて類似傾向がみられたからだと考えられた。

α 係数については、「不安」下位尺度、「願望」下位尺度については高かったが、「他力本願」下位尺度については低くなった。「他力本願」下位尺度が低くなってしまった理由には、項目数が少ないためという理由と、それぞれの項目が同じ因子について尋ねているとは言い難いのではないかという理由が挙げられた。

(2). 女子大生の恋愛における依存尺度と個人志向性尺度との関連について

女子大生の恋愛における依存尺度の「不安」下位尺度、「他力本願」下位尺度と個人志向性尺度の間に弱い負の相関がみられたことにより、「恋愛における依存尺度が低いほど、個人志向性尺度が高いだろう。」という仮説が支持されたとまではいえないが、恋愛において相手との心的距離に関する不安が高く、また、相手任せの傾向が高いほど、個人志向性は低くなる傾向があるということは示唆された。

(3).まとめ

今回の調査によって、女子大生の恋愛における依存尺度と個人志向性尺度との関連について、明確な結果は得られなかった。しかし、女子大生の恋愛における依存尺度の「不安」下位尺度、「他力本願」下位尺度と個人志向性尺度間に弱い負の相関がみられた。この結果より、「恋愛における依存尺度が低いほど、個人志向性尺度が高いただろう」という仮説は一部支持することができ、相手との心的距離に関する不安や相手任せの傾向が高くなるほど、個人志向性は低くなる傾向があると示唆された。

伊藤(1995)の個人志向性のポジティブな側面の記述では、個人志向性の高い人は自分自身の内面を受容していて個性を発揮できる特性を持っているという内容が述べられていた。つまり、逆に個人志向性が低くなると、自分の内面を受容していない、不安に感じているということになる。その自分自身に対する不安が、恋愛面において相手任せになったり、不安感を相手へと移行したりする傾向を生じさせているのではないかと考えられた。

今回は、弱い負の相関が得られ、仮説が支持できるような女子大生の恋愛における思考や行動の傾向をみることは出来たので、今回の調査で見直すべきだと考えられる点を修正すれば、より仮説が支持されるものになるだろうと考えた。

(4).今後の課題

今回の調査の反省点は、まず因子分析の際に、あらかじめ想定していた因子構造と異なる結果が得られた点である。これが生じた原因としては、質問紙に載せる項目内容に、「不安」や「～してほしい」といったキーワードが多く用いられており、3つの下位尺度において類似していたために、因子構造が偏ったものになってしまったと考えられた。

次に、内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出した際に、「他力本願」下位尺度において、基準とした $\alpha \geq .80$ を満たさなかった点である。この原因は、因子分析を行ったことにより、第3尺度が2項目となり、項目間で共通性がみられず信頼性が得られなかったためであると考えられた。

そして、次に調査を行う際に改善すべき点は、各下位尺度の項目の表現を明確にし、因子分析の際に、偏った分類がされないようにする点が改善すべき点として考えられた。

VI.引用文献

- Feeney, J.A., & Noller, P. 1990 Attachment Style as a Predictor of Adult Romantic Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, No2, 281-291
- Griffin-Shelley, E. 1993 Sex and love addiction: Definition and overview. *Outpatient treatment of sex and love addicts*. Westport, CT, US: Praeger

Publishers/Greenwood

Publishing Group, Inc. pp5-19.

伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存尺度作成の試みー男女間における恋愛依存傾向の比較ー久留米大学心理学研究, 5, 157-162

伊福麻希・徳田智代 2008 青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討 久留米大学心理学研究, 7, 61-68

伊東明 2000 恋愛依存症 KK ベストセラーズ

伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, 64, 115-122

伊藤美奈子 1995 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討 心理臨床学研究 13, 39-47

Mellody,Pia. (1992) Facing Love Addiction:Giving Yourself the Power to Change the Way You Love. San Francisco,CA:Harper San Francisco.

小塩真司 2000 青年の自己愛傾向と異性関係ー異性に対する態度、恋愛関係、恋愛経験に着目してー名古屋大学紀要 47, 103-116